

オピニオン

言葉のひと解き

清湖口敏

森鷗外 没後100年



森鷗外

▼脚気論争

来月9日は森鷗外の没後100年にあたる忌日である。ならば鷗外の作品論をひたすら「...とききたいところではあるのだが、いかんせん彼の膨大な著作群のなかで私が読んだものといえはわずか7、8作品にとどまり、即興詩人などにみられる香りが立つような雅文には大いに魅了されたといえ、阿部一族も松江拙斎も読まずして鷗外文学を語るほかに、私はすうつすい人間だとは思わない。

そこで、とうわけでもないが今回は、文豪にして陸軍の軍医総監まで務めた鷗外がどんな次第からか犯してしまった過ちを取り上げ、コロナ禍がよつよと落ちてきてきた現在の日本の為政者にあらためて、鷗外の偉功とともに「千慮の一失」についてもぜひ銘記してもらいたいのである。鷗外を評する気は全くないのは言ひまでもない。

では、その過ちとは何だったのか。没後100年にちなんだ話題や出版物等で既に「存じかとも思われる、例の「脚気論争」での鷗外の頑迷ぶりである。脚気は、今でも誰も深刻に受け止めたりはしないが、大正の頃までは毎年2万人以上の死者を出し、結核と並んで二大国民病として恐れられた病気である。下肢の倦怠感などから始まり、しびれや運動麻痺が加わって寝たきりとなる。ときには心不全を起すこともあるという。

鷗外が活躍した明治大正時代の軍隊でも脚気が多発し、これに頭を痛めた海軍軍医の高木兼寛は、英国海軍には脚気がないことに着目し、当時の日本の軍隊の食事が白米中心だったことに脚気の原因があるのではないかと疑った。そこで遠洋航海の軍艦ごとに異なる兵食を出すという比較実験を行った結果、パン中心の洋食や白米と麦の混合食を摂った水兵には脚気患者が出なかったのに対し、白米食の水兵には多数の患者が発生したとの統計データが得られた。この統計を根拠に「脚気白米原因説」への確信を深めた高木がその後、海軍の兵食に麦を加えたところ、海軍の脚気患者は激減したのである。

▼バイアス

脚気はビタミンB1の欠乏による疾患という現代医学の知識をもってすれば、脚気と白米との因果関係に立脚した高木説はなるほど学理的に正しいとはいえないまでも、結果的に海軍を救った高木の統計データには鷗外ももつと関心を寄せるべきではなかったろうか。それとも鷗外は、19世紀半ばのクリミア戦争時にナイチンゲールが統計学上に残した不朽の功績を知らなかったのだろうか。ナイチンゲールは、衛生

環境の悪い野戦病院では伝染病などで死ぬ傷病兵の数が戦死者数を上回るといふ惨状を、一目瞭然の統計グラフに示して訴えた。このグラフが国家を動かし、病院の衛生状態が改善されると、傷病兵の死亡率は劇的に低減した。自治医科大学の永井良三学長は次のように指摘する。「統計はメカニズムを実証するのではなく、仮説を創出する学術であり、その仮説によって因果も説明できることがあります。鷗外は「統計から因果は論じることはできない」という統計学の限界に敵意だったため、説明仮説まで否定したことが悲劇を生み出した」(「統計思想と日本の文化」/「科学技術と知の精神文化Ⅳ」所収)。鷗外は科学的根拠に拘泥しすぎたのかも知れない。また、こんな話もある。高木兼寛が創立した成医学会講習所に始まる学校法人慈恵大学の公式サイトによれば、高木の「海軍—英国医学」派と鷗外の「陸軍—東京大学—ドイツ医学」派は事あるごとに対立していた。そうしたとき、鷗外は組織や人間関係の情実にとられて公正な判断ができなかったとも推察できる。つまり鷗外の思考には「確証バイアス」がかかっていたと考えられるのだ。

▼コロナ禍

例えば、と思ひ出されるのは一昨年、コロナ禍下での初年年末を控えた頃だった。既に第3波入りかと思われた状況においてなお、「Go To トラベル」事業を継続させた菅義偉首相(当時)は、「同事業が感染拡大の主要な要因であるとのエビデンス(証拠)は存在しない」と主張し、年末年始の大流行を懸念する声をすくには受け入れなかった。感染者数が過去最多を更新し続けるなかで結局、事業見直しに追い込まれたが、菅氏自身が同事業の推進に積極的だったともいわれたことなどに鑑みれば、同氏も鷗外同様に確証バイアスを避けられなかったのではないかと想像される。鷗外は、脚気への対応を一生の悔いとして胸に畳んだまま、泉下の眼りについてはたどたどしい。わが国が数多くの難問に直面しているこの時期に100年の忌日が巡ってきたのも、きつと何かの縁だろう。とくにエビデンスがあるわけでもないけれど、私はそんな気がしてならない。

第32代米大統領、F・ルーズベルトの夫人、エレノア・ルーズベルトはこんな箴言を残した。「人の失敗から学びましょう。自分全部経験するには、人生は短すぎます。」(マッシュュー・サイド著『失敗の科学』) Ⅱ 次回は7月15日掲載予定

人の失敗から学ぶ公正な判断